
笑顔

あまつか比呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔

【Nコード】

N7720K

【作者名】

あまつか比呂

【あらすじ】

大海原を漂流していた私は、近くを通りかかった船に助けられた。しかし、そこにいたのは、決して微笑を絶やさない老紳士。何があろうと崩れない笑顔。それが逆に怖い。そんなお話です。

私の名前は、おおかわわたる大河涉。

今、秋の冷たい大海原を救難ボートで、漂っている。
遭難して、もう何日になるだろう。

日数を数えるのも嫌になる位、漂い続けた。
もう食料も水も尽きた。

私は、きつとこのまま死ぬのだろう。
そう思った。

そして、眠りにつく。

また明日といううんざりとする現実を見る為に。
眠るように死ねたらどんなに幸せか、そう思いつつ睡魔に襲われ瞼
を閉じた。

「おや。お目覚めですか。おはようございます」
次の瞬間。

私は、暖かいベットの^上、柔らかい布団に包まれ目覚めた。
ここは、一体、どこだ。

「貴方は、漂流していたんですよ」
声のする方に顔を向ける。

そこには、柔和な笑顔を浮かべる老紳士がいた。

「わ、私は、助かった、……のか」

私は、自分が今おかれている立場が分からなかったので、老紳士に訊ねた。

まさか助かるとは思っていなかったもので、茫然自失ぎみにふふふ。

と、微笑む老紳士。

果たして、微笑みが答えになっているのか、なっていないのか分からなかった。

が、これだけは、ハッキリと分かった。

私は、うんざりする非日常から救われたのだ。

「ここは、どこなんですか」

私は、老紳士に訊ねた。

自分の思考を落ち着かせる為に。

「ここは、客船の中ですよ。たまたまわたくしどもの船が、貴方の救難ボートのそばを通り、あなたを乗船させたのです」
「やっぱりそうだ。私は、助かったのだ。」

段々と落ち着く思考。

同時に深いため息をつく。

後悔の。

「おや、どうかされました。何か後悔する事でも」

老紳士が、私の気持ちを察して訊ねる。

私は、更にもう一度、ため息をつく。

「いや。なんでもないです」

そして、老紳士の顔を見て、苦笑いをして答えた。

相変わらず、柔らかな面持ちを崩していない。

しかし。

どこか、心を落ち着かせる事の出来ない不可思議な笑顔。

だから私は、老紳士から心を閉ざした。
いや、老紳士の言動が原因で、隠れたのではないのかもしれない。
私は、決して他人に告白できない事をしてしまったのだ。
再度、深いため息をつく。

「ふふふ。言いたくない事のようなですね。分かりました聞きません」
老紳士は、また幽玄な面持ちで、私に応えた。
その心遣いは、とてもありがたかった。
その反動だろうか。

「もし、仮に貴方が、私と同じ立場だったらどうしますか」
私は、天井を見つめボソリツと呟く。
自らの重い心を少し開き。

「おや、聞かないと申しましたのにお話なさるつもりですか」
老紳士は、笑みを絶やさず、驚き答えた。
私は、目をつむり瞑想にふけた。

「氣まぐれですよ。」
いや、もしかしたら懺悔したいのかもしれない。多分、そうです
私は、老紳士に告げた。
完全に後悔の念に支配され、ぴくりつとも動かず。

死にたい。
私は、そんな気持ちに支配されていたのだ。
まるで、心を感じがらめに重き鎖で縛られ、重りを付けられたよ
う。

とても苦しい。これは、他人には理解できない思いだろう。

「懺悔ですか」

老紳士は、小さく囁く。

相変わらず、表情を変えず誰に言うともなく。

「私の船に救難ボートは一隻しかなかった。そして食料も水も限られていたんです」

私は、目をゆつくりと開け、真っ直ぐに老紳士を見つめ続けた。肝心な事は、後回しにして、大枠からせめるよう。

「貴方の言わんとしたい事は、大体、分かりました」

そこで、老紳士が、私を制止する。

これ以上、私が私を責めるのを見たくないと思ったのだろうか。そして、続ける。

「貴方は仲間を見捨て、救難ボートで逃げ出し、水も食料も奪ったのですね」

とまるで、見てきたよう。

私は、落ち込みうな垂れコクリと頷く。

「そうするしかなかった。あのままでは私も死んでいた」

私は、少々声を荒げ、それは正しかったと、自分で自分を肯定した。それでも老紳士の表情は、一切、変わらなかった。

「つまり緊急措置だったと、貴方はそう言いたいんですね」
と、私の言葉の先に回り。

そして、続ける。

「ですが、もしかしたら助かったのは、貴方ではないかもしれないのですよ」

私は、老紳士の言葉にドキツとした。

何を言っているんだと言葉の意味が分からず。

「貴方が見捨てた船は、その後、救助されたのかもしれない。

そして、救命ボートで逃げた貴方だけが、漂流し続けたのかもしれない
ません」

老紳士は、私に気を遣っているのだろうか。

いや、違う。何かある。何故なら妙に説得力のある言葉だったから

だ。
先を聞くのが怖い。

「そして、貴方だけが死んだのかもかもしれません」

「！」

ちよつと待つてくれ。

私は、現にこうして助かっているではないか。

何を言っているんだ。この老紳士は。

ガコン。

途端、私たちの乗った船が大きく揺れる。

どこかの岸についたようだ。

「ついたようです。さあ、貴方はすぐに下船して下さい」

老紳士は、相変わらず、柔和な表情を微塵も動かさず、私を急ぎたてる。

私は訳が分からないまま、急ぎたてられるまま下船させられた。そこは。

百花繚乱の花が咲き乱れる花畑だった。

「最後に、」

船の上から老紳士が、大声を上げて私に告げる。

これは大事な事だと言わぬがばかりに。

「対岸を良く見ておく事です。何せ最後の現世なのですから
また意味の分からない事を言われた。

海に対岸などあるはずがないだろう。そんな馬鹿な。

私は、慌てて対岸を見つめる。そこには確かに対岸があった。
どこだここは。

「ここは、三途の河原ですよ。わたくしどもの船は幽霊船です。貴方は仲間を裏切った代償を払われた。だから気にやむ事はありません。」

何せ地獄行きなのですから。わたくしは死神です」

老紳士が、私に告げた。

まるで鉄仮面のような温和な微笑みを絶やさず。

「望みは、叶いましたね。ごきげんよう」と、付け加え。

笑顔、了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7720k/>

笑顔

2011年10月5日18時16分発行